

負の記憶とメモリアル表現をめぐって

笠原一人
(京都工芸繊維大学大学院助教)

アーカイブとしての都市

- 建築は常に失われる可能性に晒されている
- 新たな建設によって、建築や都市は常に更新されていくため
- 出来事の記憶のアーカイブとしての都市では、一般史料のような「収集」と「保存」が不可能
- 様々な主体の「表現」が重ね書きされていく
- しかし、それこそが記憶の「現実」なのではないか

記憶に関わる建築のあり方

- 保存
機能や形態を変えずに文化財として「凍結」
- 転用・リノベーション(改修)
記憶を残しながら建物として活用
- 復元
失われた建築を再現的に建設
- メモリアル
出来事や人物の記憶を記念する表現物
狭義のアーカイブから逸脱する建築特有の記憶表現

メモリアルの表現例

近代以前

負の記憶のメモリアル

広島平和記念公園
(1954年)

丹下健三 設計

ベトナム戦争メモリアル
(1982年)

マヤ・リン 設計

水俣メモリアル

ジュゼッペ・パローネ設計

水俣 1997年

ホロコースト・メモリアル

ピーター・アイゼンマン設計

ベルリン 2005年

ユダヤ博物館
(2001年)

ダニエル・リベスキンド 設計

負の記憶のメモリアルの困難

- 建築本来の表現が否定された表現になるという矛盾
- 常に共同体の表現であり、フィクションを含む
- 建築の言語への抽象化による表現
- 「意味」を限定するという意味で、凍結的保存と変わらない
- 社会的には必要な場合があるが、人々の記憶への関わり方として適切かどうか

宮本佳明の建築

- 従来の「保存」、「転用」、「復元」、「メモリアル」のいずれでもない(いずれでもある)出来事の記憶への関わり方を表現する建築
- 出来事の痕跡を解釈し、意味ではなくその形態を「素材」として活かす方法
- 凍結保存が不可能なアーカイブとしての都市や建築の「現実」を表現

いつかの、だれかに

—阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想展—
(2005年)

寺田匡宏・笠原一人ほか

アーカイブとしての都市

- 出来事の記憶のアーカイブとしての都市では、一般史料のような「収集」と「保存」が不可能
- 様々な主体の「表現」が重ね書きされていく
- しかし、それこそが記憶の「現実」ではないか
- 「保存」は記憶の「リアリティ」を表現するが、限定的なものではない
- 都市やメモリアルの問題は、「アクチュアル」な記憶のアーカイブを造るためのヒントとならないだろうか